

辻 誠 二

(財)東京市政調査会常務理事
(消防科学総合センター前理事長)

平成5年(1993年)は、わが国にとって、自然災害が異常に多く発生した年になりそうです。

今年が、1990年からはじまった「国際防災の10年」の第4年目であるということや、大正12年(1923年)9月の関東大震災から丁度70年になる年であることなどは直接関係はないのですが、とにかく、いろいろな災害が次々に起こりました。

思いつくものだけでも、まず、1月の釧路沖地震(M7.8)に続いて、2月には能登沖地震(M6.6)が発生しました。更に長梅雨・冷夏がはじまるなかで、平成3年の大火砕流以来無気味な動きを続けている雲仙普賢岳で大規模な土石流が起こりました。

7月12日には津波を伴う北海道南西沖地震(M7.8)が発生し、震源地に近い奥尻島を中心に、死者、行方不明者が200名を大きくこえる被害がありました。台風の襲来も例年より多く、久し振りに関東を直撃した11号と続いて、超大型といわれる13号も全国にわたって猛威をふるい、鹿児島地域を中心に土砂崩れ等の災害を与えました。

「天災は忘れた頃にやって来る」とはよく言われますが、今年起こっている各種の災害は、「忘れる間もなくやって来る」という感じです。

このうち、北海道南西沖地震(津波)についてみますと、丁度10年前、1983年5月、秋田沖の日本海中部地震(M7.7)があり、波高が10mを超え、死者100名をこす被害を出しています。この体験を踏まえ、今回は、津波警報も精度をまして、早い時期に出され、また、たとえば、奥尻島の人たちも、10年前の経験から、避難行動も迅速に行ったようです。ところが、津波は予想をはるかにこえる速さと強きで襲ってきたのです。自然の力の巨大さ、それを的確に予測することの困難さを、今更のように思い知らされました。

今回の北海道南西沖地震で、奥尻島で記録された津波波高は、最高30.6mであったそうですが、わが国で30mをこえる記録は、昭和初年以来1933年の三陸沖地震津波(38.2m)だけということですから、如何に異常に大きかったかということが分かります。

世界の津波の記録について、金子史郎著「世界の大災害(1978年刊)」によると、目撃された史上最大の津波として、1958年7月に、アメリカのアラスカ洲南端のリツヤ湾で何と51.6m(1,720フィート)におよぶ桁外れの波高が確認されたとのことでした。

震源の深浅、海底の隆起・陥没、海面の深浅、陸上の地形(入江、周囲の山等)などによって津波の表われ方も様々になるようですが、とにかく、自然の力の大きさには脱帽するほかはありません。

自然災害を未然に防止し、その被害を最小限に抑えるように努力することは、われわれ人間(社会)に課せられた責務です。自然の力の大きさと人間の能力の限界を謙虚に認める一方で、最大限の努力を続けなければなりません。究極のところ、自分のことは自分で守るという原点に戻り、またそこから出発する以外にはないのではないのでしょうか。

最近頻発する自然災害をみて、今後大きな災害が起こらないことを願いつつ、このような感想を持っています。